

# 昭和期の日本文学における在日ムスリムの表象（4）

——軽井沢篇——

福田 義 昭

キーワード：日本文学，外国人表象，ムスリム，タタール人，軽井沢

## 1. はじめに—軽井沢という舞台

本稿では、東京・朝鮮篇、神戸篇（前・後篇）に引き続き、軽井沢を舞台とする作品を扱う。昭和戦前・戦中期の日本社会を描いた文学作品等に在日ムスリムが登場するとして、それが東京や神戸を舞台とする作品であったなら、それほど意外には思われないかもしれない。一方は首都、もう一方は日本を代表する港町の一つであるから、もともとさまざまな国から来た外国人がいる。事実、当時の在日ムスリムの大半は、この二つの都市に居住していた<sup>(1)</sup>。

しかし、軽井沢を背景とする作品・文章に当時の在日ムスリムが出てくることには、やや意外の感があるだろう。もちろん、外国人が軽井沢にいること自体に不思議はない。近代以降の軽井沢はまず、外国人の避暑地・別荘地として発展してきた歴史をもつので、むしろ自然な光景である。とはいえ、それらの人々は、「軽井沢の恩父」とも呼ばれるカナダ出身の宣教師シ ヨ ー (Alexander Croft Shaw, 1846-1902) をはじめ、「西洋人」の教会関係者、教師、上流階層などがほとんどである。軽井沢に対する一般的なイメージも、西洋やキリスト教と結びついているといつてよい。

では、なぜ軽井沢という舞台に外国人ムスリムが登場するのか。それは、戦争末期に軽井沢が、主として関東地方に住む在留外国人の疎開先の一つになったからである。当時の在京ムスリムの大半を占めたタタール人は、白系ロシア

人と同様、ほとんどが無国籍だった。「敵国人」ではないため、抑留や軟禁の対象にはならない。しかし、彼らの多くがいわゆる「強制疎開」の対象となり、軽井沢に移動させられたのである。

それがいつからで、どのような範囲にわたり、実際にどの程度の強制があったかは、正確にはよくわからない。ただ、いくつか関連する史料は見つかる。たとえば、1945(昭和20)年6月5日に閣議決定がなされた「外国人居住地域ニ關スル件」という文書がある<sup>(2)</sup>。この文書には、方針として「内外諸般ノ情勢ニ鑑ミ在留外國人ニ對スル保護及防諜ノ萬全ヲ期スル爲一定地域ヲ設定シ可及的之ニ居住セシメントス」とあり、その対象を「主トシテ國內各地ニ散在居住スル歐米人トス 但シ無國籍人ヲ含ム」(傍点引用者)、そして「轉住セシムベキ地域」を「概ネ東海、北陸以東在住者ニ對シテハ長野縣輕井澤町、山梨縣河口湖畔及神奈川縣箱根町方面ヲ、近畿以西在住者ニ對シテハ兵庫縣寶塚町、有馬町及武田尾町ヲ豫定」とする。また、「外國人ヲ轉住セシムルニ方リテハ凡テ●獎ニ依ルコトトシ且落着先、荷造、輸送等ニ付可及的便宜ヲ供與ス」とある<sup>(3)</sup>。さらに備考として、この施策は「七月末概成ヲ目途」とすること、「外國人ノ地位、身分、職業等ヲ充分考慮スルコトトシ特ニ中立國人ニ對シテハ慎重ニ取扱フ」、「無國籍人等ニシテ生計ニ窮スル者ニ對シテハ適當ナル業務ニ就カシムル如ク輔導ス」などのことが書かれている。

また、小宮まゆみは軽井沢が「一九四一年、

外国人の強制疎開地に指定された」こと、「さらに一九四五年七月ころ、関東全域から外国人強制疎開が行われた」ことを述べ、同年7月8日づけで外務省軽井沢事務長大久保公使が本省政務局第四課長宛てに発出した「外国人軽井沢疎開ニ関スル件」という文書を引きつつ、受入準備が整わないうちに次々と外国人疎開者が送り込まれてくる状況に対して同公使が不満を表明していた様子を紹介している<sup>(4)</sup>。

これを見るかぎり、実際にいつごろから「強制疎開」が始まったか決定的なことは言えないが、少なくとも1945年7月になっても、全体として外国人の軽井沢への疎開はまだ完了していなかった様子がうかがえる。タタール人のあいだでも、個人によって時期にズレはあったようである。あとで見るように、ロイ・ジェームス（アブドゥル・ハンナン・サファ）は1945（昭和20）年2月には軽井沢へ送られたと述べている<sup>(5)</sup>。しかし、野上彌生子が出会ったタタール人は同年7月に軽井沢へ来たという。

一方、実際上はともかく文面上では、無国籍者を含めて、外国人を転住させるにあたっては取扱いを慎重になすべきことが説かれていたこともわかる。もちろん、当の外国人がどう感じていたかは別問題であり、この点については、あとで述べることになるだろう。

軽井沢に強制疎開させられたタタール人たちがどのくらいいたかに関しては、およその人数がわかる史料がある。外務省外交史料館所蔵の外務省記録「K 3.7.0.15 在本邦外国人ニ関スル統計調査雑件」第四巻に所収されている「在留外国人名簿」である。この史料はこれまでも鴨澤巖らによる先行研究の中で利用されてきたもので<sup>(6)</sup>、正確な作成時期については不明だが、戦争末期の在日外国人の氏名や住所、職業、年齢、性別を記した貴重な記録である<sup>(7)</sup>。

この名簿には、全部で322名の在日「トルコタタール」人が挙げられている。内訳は東京43、長野県軽井沢102、神戸市118、兵庫県有馬郡59である<sup>(8)</sup>。また名簿の「奮露（無国籍）」

のカテゴリーにも、タタール人と考えられる人々が少なくとも16名含まれている。その内訳は仙台市1、長野県4（軽井沢1、野尻村3）、岐阜県（下呂町）5、福岡市2、名古屋市1、大阪市3である。

つまり、名簿にしたがえば、軽井沢には103名のタタール人がいたと考えられる。そこに記された住所や名前から判断すると、約30家族である<sup>(9)</sup>。付言すると、彼らと階層は異なるものの、中立国であったアフガニスタンの公使館や、1945（昭和20）年2月に対日宣戦布告するまで中立を保っていたトルコ共和国の大使館関係者らも、他の同盟国・中立国の公館とともに軽井沢に移動していた。アフガニスタン公使一家5名、トルコ大使館関係者（おそらく）9名が上記名簿に記載されている。

もちろん、軽井沢が外国人の（強制）疎開地となった背景には、そもそもそこが明治以降、外国人の避暑地として発展してきた歴史があった。大都市圏から離れた場所であり、かつ、多くの外国人を居住させ管理するための場所として、軽井沢は適当であった。

また、明治後期から（とくに大正以降がそうだが）、周知のように、軽井沢は西洋人の影響を受けた日本人の上流階層や文人・作家らが避暑その他のために滞在する場所にもなっていた<sup>(10)</sup>。当然、彼らが軽井沢のことを書くと、そこに外国人が出てくることになる。川端康成の「父母」（1936）に出てくる「伊蘭公使ながしの別荘、イラン、はて？」と呟く迂闊）だとか、「百日堂先生」（1938）に登場する「皮膚の黒い人種が長い黒衣を纏って張出廊下を歩く」「どこの國の人ですか。回教徒でせうか。」「アラビアの王子だとき。ポオイに聞いたよ。」だとかは、そのような外国人がたまたまムスリムだった例である<sup>(11)</sup>。そして、彼ら作家のなかにも戦時中、軽井沢に疎開した人たちが大勢いた。その結果、彼らが疎開者としての外国人たちの記録を後世に残すことになった。彼らの興味関心は大抵の場合、自身と階層を同じくする、

あるいは階層の近い外国人、つまりふつうは「西洋人」にそそがれていたように見える。しかし、なかにはタタール人の姿を認め、彼らのことを書きとどめる人も、ごく一部とはいえ出てきたのである。

## 2. 窪田空穂

たとえば、歌人の窪田空穂（1877-1967）もその一人である。彼は敗戦前後の時期、疎開のため軽井沢に滞在した。そのとき目に留まった外国人たちの姿を「高原に集へる外人達」（1946）という文章にまとめている。

私は疎開者として、昨年〔1945年〕の七月から十一月までを、長野県の軽井沢町で過した。そこはわが国代表的の外人の集合地となつてゐて、殊に戦時中は政府の命令で集合をさせられてゐたところである。従つて足一歩屋外に出ると、見かける人の八、九分は外人で、自国人といつては極めて稀れで、かへつて珍しいくらいである。（233頁）<sup>(12)</sup>

このように書き出したあと、外国人の集合しているのが「旧軽井沢」であること、彼らがみな自転車によく乗っていること、往来での礼儀作法がよくできていること、子供たちがみな「実に日本語を綺麗に、上手に使ひこなすこと」（235頁）などを述べている。しかし、「外人馴れない」空穂には彼らの出身国はあまり判別できなかったようである。

軽井沢に群居してゐる外国人は歐洲の広い範囲に亘つてのものらしいが、外人馴れない私などの眼には、その国別は分らない。大体英米人は引揚げてしまつて居ないらしく、比較的多いのはドイツ人らしい。〔中略〕私などには丈が低く、柔和な顔をしてゐる者はフランス人、反対に丈が高く、がつちりと厳つい恰好をしてゐる者はドイツ人と

思はれる程度で、それ以上には分らない。台所口へ林檎を売りに来た中年の外国婦人に、その国を訊くとトルコだと答へたさうである。地図の上でだけ知る歐洲小国の公使館、領事館が林間に散在してゐるので、かなり雑多な外人の居ることは確かである。支那人、半島人も相応にゐる。半島人は彼らが物資を捜し出して来る腕は全く天才的で、それぞれ単独に、決して連絡をつけることなく幾らでも買い出して来て、売つてゐる。産をなしてゐる者が多く町裏の一所に群居してゐる。（236頁）

ここでいう林檎売りの「トルコ」人が「トルコ共和国」人である可能性はまずない。「在留外国人名簿」において「トルコ」に分類されているのは大使館関係者だけである。それ以外で軽井沢にいる「トルコ」人は「トルコタタール」に分類されている人々しかいない。そもそも、在日タタール人は行商に従事している人が多かったことで知られている。おそらく、この中年婦人も疎開地での生活難のなか、何らかの方法で林檎を仕入れて行商していたのだろう。疎開先でも見られたこのような「トルコ」人行商の姿は、あとで見る野上彌生子の文章のなかにも何度もあらわれることになる。

また興味深く思われるのは、普段あまり外国人と接する機会がなかったらしい空穂のような人にとっての「トルコ」の位置づけである。ドイツ人やフランス人の容姿に関する紋切型のイメージから、「トルコ」人のエピソードを挟んで「雑多な外人」の話になり、「支那人」「半島人」への言及で終わっている。文と文との論理的関係は必ずしも明瞭でないが、文脈を見るかぎり、「トルコ」人は意外な存在であり、日本人がよく知る西洋人でも、また身近な他者である中国人や朝鮮人でもない「雑多な外人」の一部という印象だったのであろう。しかも「トルコ」人のエピソードのあとに「地図の上でだけ知る歐洲小国の公使館、領事館」の話につなが

るところを見れば、空穂はこの「トルコ」人をトルコ共和国の人だと思っていた可能性も大きいように思われる。

### 3. 野上彌生子

東京や神戸とくらべると、軽井沢のタタール人に関する文章を残した人は少ない。そのようななか、比較的多くの情報を提供してくれるのが、作家の野上彌生子（1885-1985）である。彼女と軽井沢の関係は古い。夫の野上豊一郎（1883-1950）が法政大学の教師であったため、1928（昭和3）年、同大学学長の松室致が群馬県の北軽井沢に大学村をつくったとき、山荘つきの分譲地を購入した。それ以後、毎年6月ごろから夏がすぎるまで山荘での独居生活を楽しんだ<sup>(13)</sup>。戦中から戦後にいたるまで、彼女はこの山荘で疎開生活を送ることになるが、太平洋戦争が始まる前年には東京空襲に備えて、山荘で越冬できるように補強工事を済ませていたという<sup>(14)</sup>。基本的には「特権階級の疎開生活者」（岩橋邦枝）であった<sup>(15)</sup>。

その野上彌生子に「トルコ人」と題するエッセイがある<sup>(16)</sup>。岩波書店版全集では初出未詳となっていたが、宇田健によると、1946（昭和21）年6月1日発行の『新世代』第一巻第二号に「山居閑筆」の題で掲載され、のち『山彦』（1947）に収録される際に「トルコ人」と改題されたという<sup>(17)</sup>。

冒頭で、大量の疎開者の流入によって軽井沢という「国際的な避暑町が国際的な疎開町に一変するとともに、買ひ溜め買ひあさりの中心地」になった様子が紹介される。彌生子の『日記』を見ると、昭和20年10月20日の条によく似た記述が見いだせるので、終戦直後のこのころのことを言っているのだろう<sup>(18)</sup>。「軽井沢を電車一時間の下に控へ」た大学村にまで、そうした人々が押し寄せてきたらしい（221頁）。そのなかには「あまり風体のよくないところ、蘭印あたりの引き揚げ仲間でもあらうか」（222頁）という二人連れドイツ人女性などもいた。だが、買い

手だけでなく、「物売にも国際的なものが飛びこんで来る」（222頁）。それが「トルコ人」だった。

或る日の午後、疎開仲間の家へお茶に呼ばれて行つてると、まだ紅葉のいろの残つてゐる前庭の木立を抜けて、洋服の男がかつかつとテラスまで近づいて、それをもかきなアクセントで行きなりいふのであつた。

「林檎買ヒマセンカ。」

それといつしよに掲げてゐた大型のバスケットをどかりとタタキに置いて、庭椅子の一つに腰かけてしまつた。紅茶茶碗をとりあげたり、お菓子を摘まんだりしてゐた私たちは呆つ気にとられながらも、彼の若い時はもつと輝いてゐたに違ひない巫麻いろの髪毛と、それをもつと白かつたに違ひない額の、幾筋かの横皺の下にくるつとしてゐる、灰いろの窪んだ眼を見通さなかつた。「あんた、どこのひと。」

主人役の奥さんがきいて見た。

「トルコデス、トルコ人デス、奥サン。」  
（223頁）

窪田空穂が噂を聞いた林檎売りの「トルコ人」は中年女性だったが、こちらは年配の男性である。この「トルコ人」は、交通費や宿屋の支払いや買い出しの費用などがかかるので、大した儲けにはならないと「闇商人共通のせりふを型の如く述べ」てから「日本にはもう十数年ゐること、東京で焼けだされて自分も戦災者であること、同じ仲間が六人で軽井沢に家をもつてゐること、などをしゃべつて行つた」（223-224頁）。別荘地にタタール人行商が突然やってくる様子、それに驚く上流階級の疎開者たちの様子が描かれている。階層間の対比もあざやかである。

これに続けて、著者はこの行商人に対する印象を末尾で以下のように綴っている。

〔前略〕このトルコの爺さんのどこか間の



抜けた子供じみた笑顔には、本来の気の良ささうなところが見えるので、このつき来る時は、うちにも寄るよう家を教へた。〔中略〕林檎も欲しかったが、それよりも、遠いトルコから東洋の果までどうして流れて来たか。額の深い刻みと、笑ふ時二つの穴になる左右のこけた頬が示す漂泊の物語を聞いて見たかった。私の空想を笑はないで欲しい。彼がどんな作り話をしようと、おもしろがつて信じて聞けば、それで結構「林檎売のトルコ人」の話になるのである。〔中略〕紅玉が出廻る頃になつても、トルコ人は終に姿を見せなかつた。さうして彼から買った林檎の最後のもので、へんにいびつな二つが、画室の静物画のモデルのやうに、いつまでも食堂の果物籠に残されてゐた末、それも誰かが食べてしまふと、私たちはそんな異邦人の物売のことなぞ忘れてしまった。(224頁)

「間の抜けた子供じみた笑顔」をした「トルコの爺さん」が「遠いトルコから東洋の果までどうして流れて来たか」。やつれた容姿の背後にある「漂泊の物語を聞いて見たかった」以下は、作家らしい感性と物語を求める想像力を見てとることができる。どことなく哀愁を帯びた異邦人の行商との意外な出会いとそこから広がったイメージーションをつづったエッセイであるが、最後の部分などは、すでに短篇小说のしめくりといった趣がある。一度きりの不思議な出会いであるがゆえに夢想がはばたく余地がある。邂逅の痕跡たる林檎の消滅とともに異邦人の記憶も消えていく最後は、日常生活のなかに浮かんでは消える、そうした出来事の一過性を強く印象づける。

ところが、現実はそうならなかった。彌生子はこの「トルコ人」のモデルと思しき人物とその後、何度も顔を合わすことになるのである。『日記』によれば、彌生子がはじめて「トルコ人」に会ったのは、やはり敗戦直後の1945年10月1

日である。その日の日記に次のような箇所がある。

ちよつと坂元さんへ顔を出すと、トルコ人の爺さんがリングを売りに来た。五百目(十六円)を買つて帰る。もう二十一年日本に来てゐる。和泉玉川で焼け出され、軽井沢の愛宕に七月疎開して来た。豊野から買つて来るとのこと。愛宕の家には七家族とか四家族とか住まつてゐるとの話。こんな下等な連中がずいぶんはいり込んでゐるらしい。(121頁)<sup>(19)</sup>

さきに見たように、タタール人の軽井沢への疎開が敗戦直前の7月になつても続いてきたことが確認できる。滞日年数などがエッセイと微妙に違っているが、この「爺さん」がモデルとなつたのは間違いないだろう。一般向けに書かれたエッセイのほうではロマンチックな表象がなされているが、こちらは『日記』であるだけに無味乾燥な記述で、挙句「トルコ人の爺さん」には「こんな下等な連中」という辛辣な形容が与えられており、彌生子の階層意識を反映した表現上の落差に注目せざるをえない。

いずれにせよ、このときの邂逅をもとに彌生子はエッセイ「トルコ人」を書いた。宇田健の指摘する「トルコ人」の初出「山居閑筆」は筆者未見であるが、『日記』の昭和21年1月29日の条に「板倉氏からたのまれた原稿をすます。「山居閑筆」六枚、翌日に「板倉氏への原稿の手入れをしたり封をしたりしたあと〔後略〕」(200頁)とあるので、実際に「トルコ人」に会った約四箇月後の1月末に書き上がったようである。このときには、まだ「トルコ人」との再会は果たしていなかったのだろう。というのも、たしかにこの間、『日記』に「トルコ人」は出てこないからである。

「トルコ人」が再び『日記』に登場するのは最初の出会いから十箇月近く経った昭和21年8月7日である。それ以降、この「トルコ人」は

彌生子の別荘に出入りする商人となり、林檎だけでなく、バターやミルク缶、牛肉、洋梨、白米やパンなど、さまざまな食料品を持参する様子がときおり『日記』に書かれるようになるのである。タタール人に行商人が多かったことは先に述べたが、その具体的な記録はそれほど多いわけではない。1947(昭和22)年の後半になっても、彼らがまだ軽井沢で暮らしていたこともわかり、そうした歴史記録として彌生子の『日記』は貴重なものである。

また、同時代の日本人が彼らをどう見ていたかという点についても、かぎられた記述であるが、看取できることはある。彌生子が当初「トルコ人」に注いでいた視線に差別的ともいえるものが含まれていたことは先にみたとおりである。『日記』の表現にくらべると、エッセイの方がかなりありますが、それでもそうした視線は皆無ではない。西東三鬼や陳舜臣のように、戦時下の日本で社会の周縁に暮らすムスリムたちに温かい目を注いだ人たちもいるが<sup>(20)</sup>、彌生子のような境遇にあれば、素性のわからぬ貧しい外国人行商人が胡散臭く思えるのは、当然だったとも言えるだろう。

だがそれでも、長くつき合っているうちに徐々に親近感は出てくるものである。『日記』にみられる「トルコ人」の呼称の変遷には興味深いものがある。再会した昭和21年8月7日の条には「いつかのトルコ人」とあり、その後もしばらくは「トルコ人」という呼称が使われ続けている。知ってか知らずか、名前すら出てこない(8/16, 9/27, 9/29, 11/1, 11/8)。11月15日には、「トルコ人」が初めて「赤いベレ帽をかぶり娘ほど若い」「かみさん」を連れてくる。繁忙時に自分の代理としてよこすための顔合わせだが、このときもまだ「トルコ人」である。

ところが、その二日後の11月17日には「リングと牛肉をもつて来たとのアハメッドに逢ふ」(362頁)という記述があって、はじめて名前が出てくる。その後も「トルコ人」は用いられるが、名前では呼ばれることが多くなる。12月13日

には「アハメッド夫婦に正子のところから帰途行きあひ、いつしよに帰る」(375頁)までになる。また翌昭和22年2月12日には注文の手紙を「アハメッド」に出してもいる(416頁)。

その後、「トルコ屋」などもあるが、3月12日には「トルコさん」という表現も使われるなど、最低限の敬意が表されるようになる。さらに4月26日の条には「午前トルコさん来訪。パン四斤、リンゴ五百目。おひるを玄関でつかつた。おみおつけ二杯御馳走。おいしがる。ベントウの少しをおいて行く。パタのイタメ御飯をパンに包んだものである」(458頁)というように、徐々に打ち解けて、贈与交換が成立しているのもおもしろい。

そして昭和22年5月30日には、彌生子がわざわざ軽井沢の「アハメッド」の家を訪ねていくまでになった——「朝のうちアハメッドの家に行つて見る。テニス・コートの先きを左に入つた小路の小さい見すばらしい日本屋。片一方にあくしをり戸が柱にアラナワで結へてあるさうな家。留守。紙片にパン二三斤世話して貰ひ度き旨しるして帰る」(474-475頁)<sup>(21)</sup>。注文を伝える必要があったようであるし、ちょっとした好奇心から出た行動だったかもしれない。とはいえ、最初に知り合ったときからすれば、相当に心安くはなっていたのだろう。初めて見る「アハメッド」の粗末な家を見て彌生子が何を考えたかは書かれていないが、同日午後「アハメッド」夫妻がパン二斤を持参したときには、「玄関で金の話をするのはいやだから」といって百円札を預けており、彼に対する信頼も増していたことがうかがわれる。また10月31日の条には「朝トルコ人夫妻、今日は先日アサマブドウを入れてあげた容器を返しに来たのである」(563頁)とあり、単なる金銭のやりとりだけではない関係が築かれていったようである。

もっとも、これ以降、『日記』にタタール人のことはほとんど出てこなくなる。出てきたとしても昭和23年8月24日に「トルコから買ったカンヅメとお香をあげる」<sup>(22)</sup>のように、また

ぶっさらばうな呼び方に戻っていて、このころまだつき合いがあったのか、彼らが軽井沢にいたかどうかすらも判然としない。

#### 4. ロイ・ジェームスと周囲の人々

戦後ラジオやテレビの司会者として活躍したロイ・ジェームス（1929-82）は、在日タートル人のなかでもっとも有名な人物だろう。日本語を流ちょうに話す（東アジア出身者以外の）外国人が少なかった時代に、いわゆる「べらんめえ調」の下町言葉を訛りなく話す彼は、「外人タレント」のさきがけの一人だった。父親のアイナン（ガイナン）・ムハンマド・サファは東京モスクのイマームも務めた人物である。彼は日本で生まれたこの息子をアブドゥル・ハンナン・サファと命名した。アブドゥル・ハンナンは1971（昭和46）年に日本に帰化して六條祐道、その後さらに湯浅あつ子との結婚（1975年）を機に湯浅祐道と改名したが、一般にはロイ・ジェームスとして知られている。この芸名はイギリス人とアメリカ人、二人の友人の名前を組み合わせたものだったが、それゆえに有名になったあとも——彼本人は「トルコ人」であることを公言していたが、「青い目」などの容姿ともあいまって——タートル人としてのルーツがあまり知られない原因にもなった。

芸能人だったため、ロイ・ジェームスに関するこまごまとした文章は数多く残っている<sup>(23)</sup>。ここでは、戦時中の軽井沢での生活に関する部分を中心に、まず本人の名前で掲載された雑誌記事をいくつか見たうえで、彼の死後に夫人の湯浅あつ子が出版した『ロイと鏡子』（1984）を取り上げ、そのあとさらにロイの友人らによる文章を検討したい。

ロイ・ジェームスを語るときには、常套句的な表現がある。それは、「下町っ子」や「江戸っ子」「日本人より日本語がうまい」というような言葉であり、本人も常々、なみの日本人よりも強い日本への愛着を口にしていた。日本国籍を取得したときの本人名義の記事を見ると、と

きに憂国にまで達する愛国心が吐露されている<sup>(24)</sup>。とはいえ、日本で生まれ育ち日本語を自然に話す自分を、外国人ということで日本社会が差別・冷遇してきた事実を彼は隠してはいない。むしろ、そうしたことを踏まえたうえで、なおも日本への愛国心を日本人に対して訴えていた。上記記事のなかでも、

私は終戦の時、御ショウ勅を聞いて流した涙は、外人ヅラと外人籍のためにうけた死にもまさるゴーモンや労働や迫害に対してではない。こんなにまで外人の子供達が苦勞して来たのに、日本はどうして負けてしまったのだ、どうして勝てなかったのかと、ただ無性にかなしく、くやしかったのだ。その時に私は決してトルコ人として泣いたのではなく、苦勞を共にした日本人達として一緒に心から流した涙であった<sup>(25)</sup>。

あんなに戦時中、外国人として、子供心に死の恐怖を味わされたのに、そして二人の弟を亡い、自分も死にかけたり拷問されたりしたのに、まったく不思議なことに、日本人をきらいになったことは一度もなく、今も日本人だけが友人である。そして本当に私も、碧眼紅毛の日本人になってしまった<sup>(26)</sup>。

と述べている。

このような自己紹介は、日本国籍を取得してからのものではなく、それ以前から一貫している。たとえば「江戸っ子ロイ・半生記——日本人より上手な日本語をあやつるタレントの秘話」（1961）という、本人が語る形式の雑誌記事の冒頭には「オレだって日本人だ！」という小見出しが置かれている<sup>(27)</sup>。それが暗に示唆するように、記事では、日本に対する親近感と同時に、それでも自分を同胞と認めてくれなかった日本社会での苦勞が率直に語られている。

みんなから敵国人扱いをされ、「毛唐、毛唐」とのしられて、級の中ではいつもひとりぼっちでした。／放課後ともなれば、また大変で、帰り路、いきなりマントをかぶせられ、ポカリ、ポカリと袋だたきに会う始末、鼻血が出、洋服を破られることなど再三で「オレだって日本に生まれたんだから、日本人なんだ！」／とくやし泣きに泣いては、胸の中で叫びつづけたことが幾度あったでしょうか。(52頁)<sup>(28)</sup>

戦争になると、都内でも常に「憲兵隊の監視」がつく生活をし、ついには配給の米がなくなり、「茨城の方で農家をやっている、オヤジの満州時代の友だちのところへ」禁を破って密かに買い出しに出かけたところ、帰り路に「憲兵が現れ」て「警察へ連れこまれ」、「なぐる、けるの乱暴」を受けたあと、「逆さづりにされた上、ヒュー、ヒュー青竹でひっぱたかれ、そのまま気を失った」ことなどが語られ(52-53頁)、その後、軽井沢での生活に話が移る。先の「在留外国人名簿」軽井沢の欄に(不正確ではあるが)「アズドルフアナン・サファ」として記載があり、他のサファ家の五人と一緒に、たしかに軽井沢に疎開させられていたことが確認できる。当時の年齢は16と記載されている<sup>(29)</sup>。

たしかあれば、終戦の年だったと思いませんから、昭和二十年の二月のこと、ついになれわれ在日外人は、強制的に軽井沢の収容所に送りこまれたのです。毎日、憲兵隊の見張りがついて、木を切らされたり、軍需物資を運ばされたり、過酷な労働がつけました。／その収容所には、いろいろな国籍の外人たちが集まりましたが、日本人からは、おたがいに敵国視されていた身の上だということに、どういふものか、みんな仲が悪いのです。トルコなど弱小国だといって、ここでも私は、他の外人たちからいじめられました。(53頁)

このとき彼をかばってくれたのが、芸名のもとになった、ロイとジェームスだったという。これに続いて、「収容所」でのフランス人少女との初恋が語られたあと、1945(昭和20)年8月15日のことが、

だが私には、どうしても笑うことはできません。それどころか、わけもわからず、涙がとめどなくあふれ出たのには、われながらふしぎな気がしてなりません。外人ということで、あんなにいじめられたことも忘れて、そのときの私は、日本を自分がやむなく住んでいる異国と、割り切って考えることは決してできなかったのです。(53頁)

と回顧されている。戦後の生活については、父親をまねた洋服店での商売や朝鮮戦争時の貿易業、大学生活、ボクサーとしてのアルバイトなどを経て、日劇ミュージックホールで「外人タレント」となった経緯が明かされている。舞台上の仕事を彼に紹介したのは「軽井沢にいたころ、ふとしたことから」知り合った女性で、この人は映画監督千葉泰樹の夫人であった。また、ミュージックホールでの仕事を始めて数ヶ月すぎたころ、楽屋に花東が届けられたが、その差出人が、実はフランスに帰国する前に彼を一目見に来た軽井沢での初恋の相手だったことなども語られている。

ロイに関してもっともくわしく語った書物は、ロイの死から一年あまり後に夫人が出版した回想記『ロイと鏡子』(中央公論社、1984年)である。全九章のうち、四章は1983(昭和58)年に雑誌『婦人公論』に四回にわたって掲載されたもので、残りの五章は書き下ろしである。題名にある「鏡子」は、湯浅のサロンに出入りしていた三島由紀夫の作品『鏡子の家』(1959)における鏡子のモデルが湯浅自身であるところからつけられている。

本書はロイとの出会いから彼が亡くなるまで



の二人の関係を中心としつつ、それ以外のことにも触れた回想記である。「二十六年間の夫婦生活」（15頁など）とあるが、これは二人が実質的な夫婦関係にあった歳月のことで、入籍していたかどうかは別の話である（「戸籍は平行線のまま、昭和三十二年十月十二日、ロイと私は夫婦になった」, 58頁）<sup>(30)</sup>。ロイ自身は（韜晦かもしれないが）先に引用した1961（昭和36）年の記事でも依然として「三十二歳になる現在、まだ誰とも結婚しようという気は起らず、独身を通しつづけている、私なんですから——」と述べている。

いずれにせよ一般読者からすれば、二人の関係は奇妙に映るかもしれない。湯浅はロイと出会ったとき、まだ前夫である日系二世の——ロイとは対照的に日本語が「お世辞にも上手いとはいへ」ない（38頁）——米国人と結婚していた。彼は「大きな愛のかたまりのよう」（54頁）な男性ではあるが、多忙でほとんど家におらず、湯浅のくらしはいわゆる有閑マダムのものであった。やがてロイが、まだ前夫がいるうちから夫婦の豪邸に住み着くようになり、そのあと前夫は健康上の理由もあって、妻と娘をロイに託すようなかたちで帰国してしまう。そうして、湯浅とロイは実質的に夫婦として生活し始めるのである。しかし、これはロイの親族からは認めてもらえなかった関係のようで、ロイの葬儀埋葬からも著者が疎外される様子が描かれている（19-22頁）。財力のあった湯浅あつ子からすれば、自分こそが貧乏なロイを助けて一流の司会者に育てたという自負があるが（10頁）、ロイの親族からは彼の稼ぎで食べさせてもらっていると誤解されていたという（57頁）。

基本的には、裕福なパトロン女性が、貧しく粗野で奔放ではあるが、魅力的で愛すべき年下の男性を支えるという構図で、この一風変わった夫婦関係が描かれている。最後から二番目の章題に「ふぞろい夫婦」とあるように、「山の手人間」と「下町っ子」は何から何まで異文化同士だったようである。しかし、ロイがいくら

問題行動をとっても、それで彼を見捨てる気にはならない。むしろ、「駄々っ子ロイを夫としてではなく不肖の息子として扱う覚悟をきめた」（150頁）という。

本書全体をとおして感じられるもう一つの基調は、一種の懺悔・悔悟ともいべきものである。抑制された筆致とはいえロイの破天荒な生活や彼の親族との確執について率直に語りながらも、結局は「今考えると夫を見下している自分の人間性に驕りが強く感ぜられ、何とも申しわけなかったと反省している」（155頁）というところに帰着する。最初の出会いについて語る際にも、貧乏なロイが無理をする様子を語りながら、「今考えれば、何たる屈辱の想いだったろうと、気の毒になる」（41頁）とか、ロイが言い寄ってくるのを適当にあしらったことを回想しながら「これだってロイを上まわる三文台詞で、その上に気障で傲慢のおまけつきだったのが、今書いていて全く恥じ入るばかりである」（43頁）というふうには悔やんでいる。

ロイに対するこのような同情と疚しさ、すまないと思う気持ちをもっともよく出ているのが「ロイの幼少時代」と題された章（59-81頁）、とくに軽井沢での彼の暮らしを書いたくだりであろう。以下、戦後の著者がどのように戦中期のロイの暮らしを受け取ったかについて見てみたい。

まず、本稿の関心からいって重要なのは、この章の記述が当然、すべて伝聞にもとづいていることである。著者はこのころのロイを直接知っていたわけではない。戦後にロイ自身から聞いたことをもとに書いている。この点については、著者も章の冒頭でとくに断っている。

ロイの生いたちは、彼自身の口から聞いたことがすべてで、絶対に他のトルコ人と付き合わせてくれなかったロイの、これは私の直感的なものであるが、何か私に知られたくない事情が、かくされていると思うので、もしかしたらこれから記そうとする

私を知っているだけの夫ロイの生いたちに、嘘を感じる方がいられるかもしれない。〔中略〕ほんの些細なことでもロイに関する何かをお持ちの方はささやいて下さい。（59頁）

また「芸人は、その過去をいろいろ脚色する人がほとんど」（61頁）であることを指摘している著者は、情報源であるロイの言葉についても、その真実性に一定の幅をもたせて理解している。こうした点について著者は非常に自覚的で、一家の来日事情に関しても、週刊誌の記事で読んだ内容と自分がロイから聞いたことに違いがあることを指摘したうえで、あくまでロイが自分に語った内容を書いていくのである（62頁）。

おそらくロイは同じ話をあちこちでいろいろな人にしていただろう。それらを複数の人が書いているわけだが、細かい点で食い違いが出てくるのは当然である。しかし、出てくるエピソードはだいたい同じようなもので、大筋において大きな違いはない。湯浅が記す戦中期のロイのエピソードも、すでに引用したロイ自身の回想、あるいはこのあと触れる山口瞳の文章に出てくるエピソードと重複しているものが多い。

ただ、ところどころに、独自の情報や、夫人ならではの心情が吐露されているところがある。たとえば、鮭缶やじゃがいもの短冊切りなどロイの好物だったものが、実は軽井沢時代の辛い思い出と結びついていたことを語ったくだりがある（71頁）。また、ロイが生涯、軽井沢時代の暮らしに「強い思い出」を抱いていたことも紹介されている。

彼の事務所を整理した時、大事そうに、難民姿の写真と、グリーンとブルーの外人用配給券の残りが一緒にしまわれていた。よほどの強い思い出を、ロイは自分を励ます糧として時々出して眺めていたのであろう。（72頁）

ロイが「非常な愛着を軽井沢という土地によせ続け」たので、「その余りの熱望に後年、私は、娘のためもあって自費で別荘を入手して、ロイを歓喜させた」らしい。湯浅としては箱根で夏を過ごすほうがよかったが、ロイの苦労話を聞くうちに「一日本人として本当にすまないと思ひ、また戦争中の己れの生活の豊かさへの罪の意識も手伝って、ロイにうんと「幸せ」をあげたいと思った」からだという（74-75頁）。

ロイが戦争中の苦労話をしながら、「トルコ人に生まれ、サファ一家に長男として生まれた宿命だと、心でいくらあきらめても、その苦しさを一体どこへぶつけりゃあいいんだい？ 日本か？ 日本人か？ 違うんだよな。僕はチャンバラのむしり（かつらの一種）にあこがれ、六大学の野球にあこがれ、〈湯の町エレジー〉〈りんごの木の下で〉〈ダイナ〉（ディック・ミネさんの歌われたものをさす）〈旅姿三人男〉〈花笠道中〉〈りんご追分〉、虎造の浪花節、志ん生の落語がびったりの江戸っ子なんだよ。オヤジが元気なうちは、長男として、弟や妹の学費や生活全部を見なくちゃならないから、トルコ人であるが、心は立派な生粋の日本人だよ。僕は日本人として一生日本の国に生きたいんだ」というのを聞いて、「私は涙が出て仕方なかった。こんなにもいろいろあった日本で、胸を張って「僕は生粋の日本人だ」と叫ぶロイに、私一人でも力にならなくては、山の手人間も下町人間もない、日本人ではない」との思いを抱くのである（76-77頁）。

ロイに対するこうした負債感こそ、彼と親しかった人々に共通する感情であるように思える。作家・エッセイストの山口瞳（1926-1995）は、ロイより三歳年上だが、ロイの口ききでラジオのディスク・ジョッキーの台本を書くようになり、「道が開けた」という。彼はロイの死後、その思い出を「蒼い目の日本人」（1983）というエッセイに綴っている<sup>(31)</sup>。「いまから二十五年ぐらい前、ロイはよく私の家に遊びにきた」というから、昭和二十年代の前半、二人が二十

歳前後のころからすでに友人同士だったらしい。湯浅あつ子自身、『ロイと鏡子』のなかでこのエッセイに言及しながら、「山口氏は私よりくわしくロイを知ってられるのは道理で……〔中略〕山口邸に私と一緒にいる時と前後して入りびたっていたのだ」と、二人のあいだの親しい関係を説明している（66-67頁）。ところが、いつごろからか、二人の関係は徐々に疎遠になっていったらしい。その理由を山口は、戦時中の軽井沢でのロイの体験に帰している。「ロイに対して、私は、言うに言われぬ、ある種のうしろめたさがあるのだ」という。

戦時中、外国人は、強制的に軽井沢に集合させられていた。おなじ外国人でも、ドイツ人イタリヤ人は扱いが違う。ロイ・ジェームスはトルコ人だった。／少年であったロイは、軽井沢の駅で㊦の仕事を手伝わされた。日当はパン一斤である。㊦の仕事のないときは草軽電鉄に乗って山へ入り、樵の仕事をやらされた。薪を造るのである。その日当もパン一斤だった。疲れるよりも寒いのが苦痛だった。／あるとき、ロイは軽井沢の駅で倒れ、広場の端に放りだされた。それでも、顔のそばにパン一斤を置いてくれた人がいた。そのパンを手取る力がない。そのうちに、犬がきてパンをくわえて持って行ってしまった。／その日の仕事が終わる、仲間の一人がロイを担いで家へ連れていった。夜になって、その友人はドイツ人の家にしのびこみ、バターを一ポンド盗んできて、ロイにつきっきりで食べさせた。バターだけだが、いくらでも食べられた。その友人は、㊦で働く日本人が鮭缶をくすねていることを知っていた。それをわけてもらってきて、ロイに食べさせた。いくらか元気になったと思った。／私がロイに疾しさを感じるのは、こういうことがあったからである。当時、私の家は軍需成金で、軽井沢に別荘があり、食糧に

困るようなことはなかった。／終戦のとき、ロイは泣いた。／「なぜ日本は戦争に負けたのか。俺は勝ってもらいたかったのに」／彼は軍国少年でもあったのだ。〔中略〕軽井沢へ行くとき、駅にとまると、捕虜の輸送だと思われて人が集まってきた。ロイは、それが一番イヤだった。彼は日本人であり、日本軍と一緒に戦っているつもりだったのだ。〔中略〕二十五年前のことだから、記憶はアヤフヤになっているが、彼と話をすると、相撲は新海、綾昇、旭川であり、野球は若原、白木、鶴岡であり、チャンバラは羅門光三郎、阿部九州男だった。変なトルコ人だった。〔中略〕しかし、目が蒼いために彼は何度も殺されかかったのである。私もそのなかの一人だったと思わないわけにはいかない。彼が、あんなに日本と日本人を愛した訳が私にはわからない。

もちろん、これもまたロイ自身をとおした情報にもとづいているわけだが、引用末尾の文章に、それを聞いた山口に生まれた加害者意識と、それでもロイが日本を愛したことへの戸惑いが正直につづられている。

ロイに対してうしろめたさを覚えたのは湯浅や山口だけではない。シナリオ作家、エッセイストなどとして活躍した永六輔（本名は永孝雄、1933-2016）も同じだったようである。彼はロイより四歳年少になるが、生まれは同じように東京の下町で、住職の子だった。『昭和——僕の芸能私史1926-1989』（1999）で、永は戦時中のロイ・ジェームスとの出会いについて次のように言う。

そのころ、隣の竹町国民学校に、青い目で金髪の学童がいるという噂があった。／そして外国人は軽井沢に収容されるらしいというので、その子を見物に行った。／僕が初めて見た西洋人の子供だ。／大人の西洋人は聖路加病院で見かけていたが、同世

代となると珍しさが別だった。／その金髪の子は、実に堂々としていて、見物のガキどもをにらみ返し、僕もバッチリとにらまれた。／その目と再び出会った時、彼の名前を知った。／ロイ・ジェームス。／江戸前の啖呵をきる司会者になり、戦後、一緒に仕事もし、野球の仲間にもなったが、子供の時に見物に行き、にらまれた話はしなかった。／戦争中の欧米人や中国人、朝鮮人、そして強制連行されてきたアジアの人々に、日本人がどんな視線を送ってきたか。／面白がって見物に行った僕。／見物されたロイ・ジェームス。／十歳の子供でも自責の念にかられる記憶である<sup>(32)</sup>。

永もまた、日本人の一人として、戦中期の在日外国人の扱いに対する悔悟の念を表明している。ただし、この回想で不思議なのは、ロイの民族的出自にも宗教にも言及がないことである。読者がロイのことをよく知らなければ、彼を単なる「西洋人」だと思っただろう。無論、永がロイの出自を知らなかったとは考えにくい。永はロイが司会をしていたラジオ番組に放送作家として参加し、放送作家が中心になったチームで二人は一緒に野球をする仲だった<sup>(33)</sup>。実際、少し新しい対話集『生き方、六輔の。』（2002）には、ロイがムスリムだったことに対する言及がある。

で、彼はイスラム教徒なのね。ロイは亡くなりましたけれど、僕がイスラム教と最初に触れあった接点は彼なんだよね。こうやって普通に彼と話していても、時間が来るといきなり礼拝が始まりましたからね（笑）。

——そんなに敬虔な信者だったの？

ロイのお父さんは、代々木上原のモスクの聖職者でしたからね。原理主義ですから。僕、イスラム教の知識って、コーランのことでも何でも全部ロイから教わってる。イ

スラム教徒ってどういうものかも、ロイとのつきあいの中で知った。

〔中略〕

……たとえば、僕らの野球試合の最中に、ファーストのロイがお祈りの時間だって言う。「おまえ、野球が終わってからお祈りしろ」って言うのと、「そういうもんじゃないんだよ、永さん」って。「みんなが試合してるのに、おまえさんがそこで一人で礼拝するのは困る」って言っても、「そういうもんじゃないんだ」って。だから、タイムの間、ロイがメッカの方向に向かってお祈りするの、みんな待ってたの。三回すれば、すぐ終わるからって<sup>(34)</sup>。

「そういうもんじゃないんだ」という言葉は、日本人に一般的な宗教的無頓着と和の重視に対する一神教徒からのきわめて正当な返答であろうから、こうしたエピソードには真実味があるように思われる。いずれにせよ、永の二つのエッセイにこうした違いが出てきたのは、要するに、二つの書物が2001年の米国同時多発テロの前後に出版されているのが原因である。『昭和』の初出は1997年から98年（『週刊朝日』）であり、このころにはロイがムスリムであることにとくに意識が向かなかったのかもしれない。しかし、『生き方、六輔の。』が出版されたのは同時多発テロのすぐ後で、イスラム教が日本でも普段の話題に上るようになっていた。この箇所でも永は同時多発テロに触れながら、イスラムに関する日本人の無知を指摘しているが、そうした状況のなかで、ロイがムスリムであったことがあらためて強く意識に上ってきたということだろう。

この本でもう一つ不思議なのは、二人が出会った場所が東京ではなく、長野になっている点である。

……ところで、話は戻るけど、疎開先にいるときに戦争が終わって。外国人が軽井沢に集められて、彼らが食うに困って毛布



やらいろんな物を持って、僕のいた小諸界隈に売りに来るんですよ。その、物売りに来る子供たちの中に生意気なやつがいて、それがロイ・ジェームス〔タレント、一九二九～八二〕だったの<sup>(35)</sup>。

『昭和』では、東京の下町で、これから軽井沢に連れていかれるロイを見物にいったという記述がなされていた。しかし、『生き方、六輔の。』では、永が疎開先の長野県小諸で戦後にロイと初めて出会ったように読める。なぜこのような相違が出たのかは不明である。単なる記憶の混乱によるものかもしれないが、あるいは、『昭和』にある「その目と再び会った時、彼の名前を知った」という一節は、実は小諸での「再会」を意味しているのかもしれない。

一般に華やかなイメージがある軽井沢で、戦中期、ロイ・ジェームスらに在日タタール人は銃後の普通の日本人以上の苦労を味わった。たしかに、戦争という大きな物語の中で、それは小さなエピソードに過ぎないと言えるかもしれない。しかし、こうして周囲の人々に語り継がれることで、彼の苦労は日本人にとっても意味のある経験になったのである<sup>(36)</sup>。

## 5. おわりに

以上、戦前・戦中期の軽井沢を背景に外国人ムスリムが登場する作品について、管見に入っただけのものを紹介してきた。あまり多くはなく、また見逃している例も相当あると思われるが、少なくとも本稿で検討した作品類から導ける特徴を以下に整理してみたい。

第一に言えることは、川端康成の小さな例をのぞいて、登場するムスリムは、やはりすべて疎開したタタール人だということである。これは第1節で述べた経緯からして、きわめて自然な結果と言える。ロイ・ジェームスという芸能人が出たことが大きいですが、同時に、文人たちが多くいる土地であったことは、軽井沢における彼らの痕跡が残る大きな理由となった。また、

これはほかの土地についても言えるが、タタール人が行商に従事し、一般の日本人と接触する機会が多かったこと、さらに彼らが——子供たちは流暢に、大人たちも積極的に——日本語を話したことも、彼らの存在を日本人に印象づけることに役立ただろう。東京や神戸のようにモスクという象徴があるわけではない場所では、なおさらである。

ただし、彼らの呼称としてタタールはまったく出てこない。ロイ・ジェームスをはじめとして彼ら自身が「トルコ人」という自称を使っている。窪田空穂や野上彌生子が見聞した行商人たちも「トルコ人」と名乗っている。たしかに、これは彼らの日本社会での自称・他称としてもっとも一般的なものだったろうが、東京や神戸の例を見れば「トルコ・タタール」などが用いられている例も皆無ではない。軽井沢のタタール人について書き残した人々のなかには、そもそもタタール人の民族性に詳しい専門家やそれに近い人々がいなかったということだろう。

ところで、この「トルコ人」という呼称は一般の日本人の誤解を生むものにもなっているように思える。窪田空穂が彼らをトルコ共和国出身者と誤解していた可能性についてはすでに指摘したが、野上彌生子も同じような誤解をしていた可能性がある。「遠いトルコから東洋の果までどうして流れて来たか」という文言を見ると、少なくとも彼らタタール人の来日事情について理解していたようには見えない。親しくなっただけからは、そうしたことを聞いて当然とも思えるが、『日記』等には記されていないようで、本当のところはよくわからない。

ロイ・ジェームスと結婚した湯浅あつ子ですら、そのあたりの事情にはあまり通じていなかった印象を受ける。「ロイ説によると、彼の父はトルコの県知事の家柄で、第一次世界大戦に陸軍中尉としてロシアと戦い、シベリアでやぶれ、それが地理的音痴の私には難解な話なのだが、朝鮮に逃げ〔後略〕」という箇所を見ると（その真偽は別として）、タタール人の歴史

という視点がおそらく欠けているように思われる<sup>(37)</sup>。くわえて「私は、第二次大戦（太平洋戦争）の日本の敵対国は、アメリカとイギリスと、あとからひょいと参戦したソビエトだけだと思っていたら、何とトルコが敵国だなどとは露知らなかったが、ロイと一緒に、その苦勞話で知り、黒いベールとコーランと剣を共有する国くらいにしか、学校では習わなかった自分の不明がなさげなかった」という一節もある<sup>(38)</sup>。中立を守っていたトルコ共和国が1945年2月、日本に対して宣戦布告し、以後敵国となったことは事実である。しかし当時、ほとんどの在日タタール人はトルコ国籍を取得しておらず、依然として無国籍だった<sup>(39)</sup>。トルコ国籍取得者が急増するのは戦後のことである。「在留外国人名簿」でも、サファ家は「トルコ」ではなく「トルコタタール」に入れられている。サファ家が例外的にトルコ国籍を当時から取得していたのかどうか、筆者は詳らかにしないが、そうでないのなら（ロイ自身が曖昧な言い方をしていたからとも言えるが）、湯浅がいわゆるテュルク系諸民族という意味での広義の「トルコ人」と「トルコ共和国人」を区別していなかったように思えるのである。これは軽井沢にかざられることではない。結局のところ、在日タタール人の姿が見えにくかった原因の一つは、一方で（その容姿と来日事情、職業、生活形態などから）白系ロシア人、もう一方で（呼称から）トルコ共和国人という集団と同一視されがちであったことだろう<sup>(40)</sup>。

タタール人のムスリムとしての属性に関しては、あまり深く触れられていないと言える。これも、東京や神戸と比べて例外的なことではない。基本的には、ムスリムとして描かれるよりは、「トルコ人」として描かれるほうが多い。湯浅あつ子はさすがに「回教」に触れているが、その理解は不十分なようであるし、きわめて日本的な宗教理解が前面に出ている。永六輔も、本稿でとりあげた最初のエッセイではイスラム教にはまったく触れていない。しかし、二番目

にとりあげたエッセイでは、その後の世界情勢を反映して、ロイのムスリムの属性が想起されているように見える。

「強制疎開」の実態については、とりあげた作品や文章をとおして接近できる点も多い。第1節で述べたように、日本政府の施策としては、疎開させる外国人はそれなりに丁重に扱われることになっていた。しかし、当事者にとっては、「強制的に軽井沢の収容所に送りこまれた」という感覚であり、「毎日、憲兵隊の見張りがついて、木を切らされたり、軍需物資を運ばされたり、過酷な労働がつづ」いたのである<sup>(41)</sup>。ロイ・ジェームスのこうした苦勞こそ、戦後の日本人が負い目に感じた点であった。

もう一つ、興味深く、また印象的に思われる点は、戦争末期から戦後にかけての困難な時期を、それでもタタール人たちがたくましく生き抜いたことである。『軽井沢物語』（1991）を書いた宮原安春は、戦後の数年間、軽井沢警察署の巡査として勤めた人物の次のような言葉を伝えている。

「もっと悲惨だったのは、疎開していた小国の人たちでした。トルコやアフガニスタンなどの人たちが残ってましたが、本国から仕送りはとだえ、占領軍からの援助もなかったようです。特に亡命ロシア人など無国籍の人が何人もいた。そんな人たちが戦後の混乱期をどう生きのびたのか不思議なほどです」<sup>(42)</sup>

ここで言われているアフガニスタンは公使館関係者に違いないが、「トルコ」が大使館関係者をさすのか、タタール人をさすのかはわからない。あるいは、タタール人は「亡命ロシア人などの無国籍の人」に入れられているのかもしれない。いずれにせよ、この元巡査の疑問に対する答えの一端は、本稿で扱ったようなテキストのなかにいるロイ・ジェームスや「アハメッド」たちが教えてくれるだろう。

<注>

- (1) 両都市に比べると人数は少ないが、名古屋などにもタートル人が住んでいた。しかし、筆者はまだ名古屋のタートル人を描いた文学作品等を発見できていない。名古屋のタートル人については、吉田達矢の一連の論文（「戦前期の名古屋におけるタートル人の諸相——人口推移と就業状況を中心に」『名古屋学院大学論集 言語・文化篇』24(2), 2013年, 281-291頁など）を参照。
- (2) 「外国人居住地域ニ関スル件」JACAR（アジア歴史資料センター）Ref. A14101314300, 公文類聚・第六十九編・昭和二十年・第三十九卷・族爵・位階勲等, 儀典・服制・国葬, 外事・雑載（国立公文書館）。
- (3) ●部分は活字がつぶれていて判読不能であるが、「勸」かもしれない。
- (4) 小宮まゆみ『敵国人抑留——戦時下の外国民間人』（歴史文化ラブラリー267）吉川弘文館, 2009年, 216頁。
- (5) 『日本映画俳優全集・男優編』（キネマ旬報増刊772号, 1979年）の「ロイ・ジェームス」の項（643-644頁）には「45年3月9日の学校焼失後は外国人のため軽井沢に抑留される」とあるが、情報源は不明。
- (6) 鴨澤巖「在日タートル人についての記録（二）」法政大学文学部紀要29, 1983年, 223-302頁；渡辺賢一郎「戦前期の神戸におけるタートル人の集住と活動——移民・コミュニティ・ネットワーク」『東洋大学人間科学総合研究所紀要』第5号, 2006年, 206(47)-183(70)頁。
- (7) 2018年9月現在、デジタル化されておらず、「アジア歴史資料センター」でオンライン閲覧することはできない。表紙にボールペンで書かれたと思われる「昭和十七、八年のもの外務省年鑑にて」という文言が見えるが、1944(昭和19)年以降に作成されたことを示唆する情報が含まれているため、実際にはもっとあとの時期のデータとみられる（本稿註29も参照）。この資料の詳細については、拙稿「神戸モスク建立前史——昭和戦前・戦中期における在神ムスリム・コミュニティの形成」『日本・イスラーム関係のデータベース構築——戦前期回教研究から中東イスラーム地域研究への展開』（平成17年度～平成19年度科学研究費補助金基盤研究（A）研究成果報告書, 研究代表者：白杵陽〔日本女子大学文学部〕, 21-62頁；54-55頁の註70を参照）。
- (8) 有馬は主として神戸からの疎開先であるが、軽井沢とくらべて実態はわかりにくい。ただ戦中期の神戸では、数字を見てもわかるように、無国籍タートル人たちは行動の自由を制限されたものの、市内に残った者が多い。有馬へ疎開していたユダヤ人らの回想、そして陳舜臣の作品における記述などを見ても、無理やり有馬へ疎開させられた感じはしない。むしろ自主的な避難であったように思われる。なお、在神ユダヤ人の有馬への疎開については、以下のインターネット・サイトを参照（Tamar Engel, “The Jews of Kobe.” [http://xenon.stanford.edu/~tamar/Kobe/Kobe.html]2018年10月4日アクセス）。陳舜臣が触れるタートル人の有馬疎開については、拙稿「昭和期の日本文学における在日ムスリムの表象（3）——神戸篇（後篇）陳舜臣」『アジア文化研究所研究年報』（東洋大学アジア文化研究所）第52号（2017）, 1(366)-23(344)頁；19頁を参照。
- (9) 鴨澤や渡辺は在日タートル人に関する先行研究のなかで、この名簿に種々不正確な点があること、また名古屋や熊本などにあった比較的小規模のタートル人コミュニティが掲載されていないことなどから、その信頼性に部分的な疑義を呈している（鴨澤「在日タートル人についての記録」（二）, 227-228頁；渡辺「戦前期の神戸におけるタートル人の集住と活動」, 198(55)頁）。遺漏があった可能性はもちろんある。また、たしかに人名表記などを見ても不正確な点が多々あるうえ、一部情報の重複なども見られる。ただし、名古屋や熊本のコミュニティが記載されていないのは、名簿作成時点でそれらのタートル人が実際に別の場所（とくに神戸）へ移動していたためである可能性が高い。そうであれば、少なくとも人数に関しては、鴨澤や渡辺が述べているほどには、この名簿の信頼性は損なわれないように思われる。この点の詳細に関しては、拙稿「神戸モスク建立前史」33頁および55頁の註74-75を参照。
- (10) 小川和佑『文壇資料 軽井沢』講談社, 1980年

- (とくに巻末の「軽井沢文学年表」は文人らの軽井沢訪問時期を一覧するのに便利である)。
- (11) 『川端康成全集』第六卷, 新潮社, 1999年, 169頁。「アラビアの王子」は, その風貌からしても, 1938(昭和13)年10月という作品の発表時期からしても, 同年の東京モスク開堂式に合わせて来日したイエメン王子を川端が作中に取り入れたものだろう。
- (12) 『窪田空穂全集』第六卷(紀行・随筆), 角川書店, 1965年, 233-238頁。引用文中の亀甲括弧内は引用者による補足である(以下同様)。
- (13) 岩橋邦枝『評伝 野上彌生子——迷路を抜けて森へ』新潮社, 2011年, 79-81頁を参照。
- (14) 同上, 77頁。
- (15) 同上, 89頁。
- (16) 『野上彌生子全集』第二十卷, 岩波書店, 1981年, 221-224頁。以下, この作品からの引用はこのテキストより行う。
- (17) 宇田健編『山荘往来——野上豊一郎・野上弥生子往復書簡』岩波書店, 1995年, 376頁(註129)。
- (18) 『野上彌生子全集』第二期第九卷, 岩波書店, 1987年, 133頁。
- (19) 以下, 『日記』からの引用はとくに断らないかぎり『野上彌生子全集』第二期第九卷, 岩波書店, 1987年より行う。
- (20) 拙稿「昭和期の日本文学における在日ムスリムの表象(2)——神戸篇(前篇)」『アジア文化研究所研究年報』(東洋大学アジア文化研究所)第51号(2016), 129(308)-108(329)頁; 前掲「昭和期の日本文学における在日ムスリムの表象(3)——神戸篇(後篇)陳舜臣」を参照。
- (21) この部分に続く箇所に「おのぶさんは赤ん坊をおんぶしてユービン局の方へ分かれた」(475頁)と, 実際にテニスコート近くにあった郵便局に対する言及がある。これと彌生子の代表作の一つ『迷路』に出てくる軽井沢の「どこか郵便局の裏あたりに巢喰ふトルコ人, アルメニア人といつたものにまで聯絡があり, 今ではどこにもない筈のものが, 莊田ため子に頼めばわけなく現はれるからである」(『野上彌生子全集』第十一卷, 岩波書店, 1981年, 95頁)を突き合わせて鑑みるに, やはり後者は「アハメッド」の家を訪ねた経験がもとになっていると推察される。
- (22) 『野上彌生子全集』第二期第十卷, 岩波書店, 1988年, 122頁。
- (23) インターネット上の動画サイトには, 彼の名司会者ぶりがわかる動画や音声も多数投稿されている。
- (24) 六條祐道(芸名・ロイジェームス)「遂に日本人になった」『月刊ペン』1971年11月, 42-44頁; ロイ・ジェームス「日本人になって」『20世紀』1971年11月, 108-109頁。
- (25) 「遂に日本人になった」43-44頁。
- (26) 「日本人になって」109頁。
- (27) 『日本』1961年6月, 52-54頁。
- (28) 引用文中の斜線(/)は, 本文中の改行を示す(以下同様)。
- (29) なお, 当時から公文書関係ではふつう満年齢を使うので, ロイが一般に言われるように1929年3月生まれだとすると, 名簿が戦争末期になって作成されたことを裏づけることになる。1941年や42年に作成されたのであれば, たとえ数え年であったとしても, せいぜい13, 4歳と記載されたであろう。そもそも, 次の引用にあるように, ロイ自身, 1945年に軽井沢へ移ったと述べている。
- (30) 前掲『日本映画俳優全集・男優編』に「75年に湯浅あつ子と結婚, 湯浅祐道と改姓した」とある(644頁)。
- (31) 『週刊新潮』昭和58年3月3日号, 52-53頁(読切連載「男性自身」991)。
- (32) 永六輔『さよなら芸能界』朝日文庫, 2001年, 76-77頁(初刊:『昭和——僕の芸能私史1926-1989』朝日新聞社, 1999)。
- (33) 隈元信一『永六輔——時代を旅した言葉の職人』平凡社新書, 2017年, 30頁。
- (34) 永六輔+矢崎泰久『生き方, 六輔の。』飛鳥新社, 2002年, 31-33頁。
- (35) 同上, 31頁。この引用のなかの亀甲括弧は原文。
- (36) 文学作品としては, 島田雅彦(1961-)が, 日本近代史を背景とする大河恋愛小説《無限カノン》第一部『彗星の住人』(2000)に, 白系ロシア人のプロ野球選手スタルヒンとともに, 軽井沢時代のロイ・ジェームスを登場



- させている（島田雅彦『彗星の住人』新潮社、2000年、221頁）。
- (37) 『ロイと鏡子』、62頁。
- (38) 同上、67頁。
- (39) 松長昭『在日タタール人——歴史に翻弄されたイスラーム教徒たち』（ユーラシア・ブックレット134）東洋書店、2009年、52-55頁。
- (40) 諸田玲子（1954-）の『軽井沢令嬢物語』（潮出版社、2010年。初出は『パンプキン』2008年4月号—2010年3月号）にも、敗戦直後の軽井沢を描いた部分に「戦勝国の将兵が町を闊歩しているその陰で、国からの支給を絶たれたトルコやアフガニスタンなど敗戦国の人々は、帰国の順番を待って、衣食住にも窮する日々を送っていた」（127頁）というような記述がある。あとで見る宮原安春の言葉を誤解したのかもしれないが、トルコは戦勝国であり、アフガニスタンは中立国であったから、そもそもこうした地域自体があまりよく理解されていないと言えるかもしれない。
- (41) 白系ロシア人たちの経験は、タタール人らの経験を類推的に知るのに役立つことが多いが、無国籍者として同じように軽井沢へ疎開させられた人物に、日本のプロ野球界で活躍したヴィクトル・スタルヒン（1916-57）がいる。その長女ナターシャ・スタルヒン（小湊ナターシャ）による伝記（1986年）には、「軽井沢幽閉」や「疎開といえは響きはいいが、結局は抑留である」などという表現が使われている（ナターシャ・スタルヒン『ロシアから来たエース——300勝投手スタルヒンのもう一つの戦い』PHP研究所、1986年、143頁以降を参照）。
- (42) 宮原安春『軽井沢物語』講談社、1991年、368頁。  
（客員研究員／大阪大学大学院  
言語文化研究科准教授）

Abstract

## **Literary Representation of Muslims in Japan during the Showa Period ( 4 ):**

Works Set in Karuizawa

FUKUDA Yoshiaki

This article is a sequel to my three earlier articles on the literary representation of Muslims in Japan during the Showa Period. While the earlier articles dealt with literary works set in Tokyo, Korea and Kobe, this article deals with works set in Karuizawa, a mountain summer resort north of Tokyo, to which more than 100 Tatars, along with other foreign citizens, were forced to move to live under harsh conditions at the end of the WW2 and its aftermath. Some of the Japanese writers who also moved to Karuizawa for their safety incidentally depicted them in their writings. A young Tatar named Abdul Hannan Safa suffered a lot of pain in this evacuation life, but he became a popular radio and TV host “Roy James” after the war, and eventually obtained Japanese citizenship. The texts written by and about him, as well as those written by Japanese writers about other Tatars in Karuizawa, give us an insight about the details of the hardships through which Tatars in Japan passed during the war, and at the same time, about how Japanese people viewed these strangers.

Key words: Japanese Literature, Representation of Foreigners, Muslims, Tatars, Karuizawa